



# 水から学ぶ

学校長 小邑 政明

私の実家は川のそばにあって、子どもの頃は水泳や魚釣りなど活動の拠点になっていた。今にして思えば、川底が実際より浅く見える、川の中で石を動かすと軽いなどの経験が、光の屈折や浮力についての学習の理解を容易にした。川の対岸には町のゴミの焼却所があって、一定程度たまと焼却され、大水がでると灰などが流されるというシステムになっていた。今なら大きな環境問題になるところだ。大水が引くと子ども達がそこに集まって川底から焼け残った硬貨をさがす。お菓子を買って小さい子にも平等に分けて食べる。小遣いのなかった当時の子ども達の知恵である。自然の中から「水の力」を学んでいたのだろう。

1973年に放送された岐阜を舞台にしたNHKの大河ドラマ「国盗り物語」で竹中半兵衛を演じた米倉斉加年の名演技が今でも脳裏に残っている。

半兵衛は、戦国時代稲葉山城(現在の岐阜城)の城主斉藤龍興を諫めた賢人で、大野町出身である。秀吉が、信長の命により「三顧の礼」をもって軍師として迎えた人物である。信長の誤解から処刑を命じられたもう一人の軍師黒田官兵衛の長子松寿丸(後の長政)を匿い命を救ったことでも知られている。

半兵衛は36歳の若さで世を去るが法号は「深竜水徹」という。黒田官兵衛は家督を長政に譲った後黒田如水と名乗るが、「如水」は「深

竜水徹」からきているという説がある。「深竜」は「知られざる賢人」、「水徹」は老子の言葉「上善水の如し」がもとになっているので、ふれてみよう。意識はおおよそ次のようである。

「理想の生き方とは、水のような生き方である。水は様々なところに恩恵を与えながらも決して争わない。(中略)心は深い淵のように静かに澄み渡らせるのが良い。そうすれば様々な物事をゆっくりと見極め、あるがままに受け入れることができる。」

如水の名言「四角な器にも円い器にも、水は器に応じて入る。」や、水五訓「自ら活動して他を動かすは水なり。等」は、如水が半兵衛の考え方や生き方に大きな影響を受けていることが読み取れる。

如水は晩年福岡市の繁栄に大きく貢献した。今日受験の神様といわれている太宰府天満宮の再建にも力を入れ、敷地内に草庵を構えたと伝えられている。天満宮は、本校の修学旅行のコースにもなっているので、関連資料や施設があれば是非見てほしい。

折しも本年の大河ドラマは「軍師官兵衛」である。主人公の官兵衛に注目が集まりがちであるが、半兵衛が「水から学ぶ」ことを通して確立した生き方によって、後継者官兵衛を立派に育て戦国の時代を終わらせた功績にも光を当てていただきたいと願っている。

今回は「石から学ぶ」について書きます。